



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3267号 2016.9.20 発行

社説：相模原事件 さらに多角的な検証を

北海道新聞 2016年9月20日

病院や行政の対応・連携に不十分な点があったと指摘された。関係機関は、重く受け止めなければならない。

相模原市の障害者施設で19人が殺された事件について、厚生労働省の有識者チームが検証の中間報告書を公表した。

事件前に精神障害とされ強制入院させた容疑者に対して、さまざまな治療を検討すべきだった。退院後は医療的な支援が行われず、孤立させた一。こうした問題点や検討課題を挙げている。

ただ、事件と精神障害の関連を示す証拠が、現時点で何もないことにも留意する必要がある。動機もまだ解明されていない。

最終報告に向けては、可能な限り警察とも情報交換し、さらに多角的な検証を進めてほしい。

容疑者は事件の約5カ月前、犯行予告の手紙を衆院議長公邸に届けるなどしていた。

報告書は、「自傷他害の恐れ」に基づく強制的な措置入院は妥当だったとしつつ、病院側の「不備」も指摘する。

中でも気になるのは、容疑者の薬物使用への対応だ。詳しい医師がいないのに、外部の意見を聴くこともなく、薬物依存の治療は行われなかった。

病院側は結局、「大麻精神病」などと診断した。だが、一般的に大麻の使用だけで、「障害者を抹殺する」という思考が生じることは考えにくいともいう。

報告書は、他の精神障害の可能性も考え、生活調査や心理検査を尽くす必要があったとの見解を示す。大きな論点であり、さらなる検証が求められよう。

退院後の容疑者の居住先についても、親と病院側に認識の食い違いがあった。実態とは異なって書類上、「市外に居住」という扱いとなり、相模原市の医療的な支援の対象から外れた。

市役所内の連絡体制も不十分だったという。容疑者は市に生活保護の申請をしており、市内に居住していることが認められたが、医療担当部局は把握していなかった。縦割りの弊害ではないか。

報告書は、他の病院や自治体でもあり得る問題だとして、法制度を含む見直しを提言している。

診断や治療を親身に行い、退院後の医療支援や相談を丁寧に続けるのは大切なことだ。

しかし、忘れてならないのは、患者の人権やプライバシーを守る視点である。治療や「支援」が「監視」につながるような制度にしてはならない。

武藤事務総長「きょうが始まり」と決意 パラリンピック総括

日本経済新聞 2016年9月20日

【リオデジャネイロ=共同】2020年東京五輪・パラリンピック組織委員会の武藤敏郎事

務総長は19日、リオデジャネイロで記者団の取材に応じ、18日に閉幕したリオデジャネイロ・パラリンピック大会について「大変に成功したと思う」と総括した上で「次はわれわれの番。きょうが始まり」と決意を新たに示した。

閉会式で行われた東京への引き継ぎセレモニーでは「POSITIVE SWITCH（前向きなスイッチ）」をテーマに障害者がパフォーマンスを披露。武藤事務総長は「障害者への見方を根本から変えるメッセージを発信した。五輪の時のようなサプライズ演出は今回なかったが、多くの人が感銘を受けてくれたと思う」と評価した。

大会の運営面では自転車で死亡事故があった問題に哀悼の意を表し「スポーツの試合でも危険な部分があることを再認識した」と4年後への課題として受け止めた。

4年後、東京でも輝く リオ・パラリンピックが閉幕 共同通信 2016年9月20日



閉会式で引き継がれたパラリンピック旗を振る東京都の小池百合子知事＝リオデジャネイロで

【リオデジャネイロ＝伊藤隆平】バトンは二〇二〇年の東京へ。リオデジャネイロ・パラリンピックの閉会式が十八日夜（日本時間十九日朝）、現地のマラカナン競技場であり、十二日間にわたって繰り広げられた障害者スポーツ最大の祭典が幕を閉じた。五輪とともに開かれる次回の四年後に向けて、これからは東京が世界の関心を集め、課題を背負う。

式典で、パラリンピック旗がリオデジャネイロ市長から、国際パラリンピック委員会（IPC）のフィリップ・クレーブン会長を経て、東京都の小池百合子知事へと渡された。君が代が流れる中、ブラジル国旗の横に日本国旗がゆっくりと掲揚された。

金メダル十個を目標に百三十二人で臨んだ日本選手団は、夏季大会では史上初めて金メダルがゼロに終わり、東京・パラリンピックに向けて課題が突きつけられた。メダル総数は銀十、銅十四の二十四個で、前回の十六個（金五、銀五、銅六）を上回った。

ロシア選手団はドーピング問題で出場できなかったが、百五十九カ国・地域と難民選手団の四千三百人以上が参加。史上最大規模となった。南米初のパラリンピックは二百を超える世界記録が出るなど、障害者スポーツのレベルが向上していることを物語った。

閉幕式の会場は八万人の観客席の多くが埋まり、各国選手団が集結。大会中の名場面を振り返る映像が次々と大型スクリーンに映し出された。

式の冒頭では、競技中の事故で死亡した自転車男子のバハマン・ゴルバルネジャド選手（イラン）に黙とうがささげられた。

◆認知度高め、盛り上げる 小池知事

東京都の小池百合子知事は、パラリンピック閉会式終了後に記者団の取材に応じ「切符が取り合いになるくらい、パラリンピックを盛り上げたい。その価値がある」と、東京大会に向けて抱負を語った。

盛り上げに向け、競技の認知度を上げるために小中学校での体験を進める考えを示した。

引き継ぎ式では、タンチョウヅルをあしらった服を着て登場し、旗を受け取った。「旗と（服が）一緒に翻ればいいなと思った」と説明した。

メダルの数より大切なこと 本社取材団キャップ・村瀬 中日新聞 2016年9月20日

会場はいつも歓声で揺れていた。手をたたき、大声を上げ、時に踊る。競泳の場合、最も大きな地響きがしたのは地元ブラジル選手がゴールする時。次は、国を問わず、大きく遅れた最終泳者がゴールするまでの間だった。

低調さが心配されたリオデジャネイロ・パラリンピックは大いに盛り上がった。ノリの良い音楽や実況アナウンスが一役買っていたが、何よりも観戦の楽しみ方を知っているカリオカ（リオっ子）たちの明るさ、温かさによるものが大きい。自転車選手の悲しい事故がなければ、最も成功した例に数えられたかもしれない。

日本勢の金メダルはゼロに終わった。スポーツである限り、勝つことは目標だが、パラリンピックはそれが全てではない。歴史をひもとけば、戦傷兵士の治療の一環で始まった。競うことでやる気を高め、リハビリ効果が上がり、競技性が強まった。

テレビ中継などを通じ、多くの人が障害者の能力と可能性に心を打たれたとすれば、パラリンピックの大きな功績だ。メダルを取れば、選手も応援している人も盛り上がる。

ただ、障害者とスポーツの関係は矛盾を包含する。容赦ない競争と、それとは無縁でも個性を重んじなければいけない価値観とがせめぎ合う。だから、自らの限界に挑んだ上で敗れ、「力が及ばず、申し訳ない」と語る選手の姿を見るのは悲しかった。

東京大会に向けて国内選手の強化策などが取り沙汰されるだろう。メダルを増やすこと以上に、障害者スポーツの裾野を広げることに主眼を置かなければならない。スポーツにとどまらず障害者を取り巻く環境は発展途上であり、選手育成に絞った対策だけでは不十分で、五輪とは違った視点が求められる。

今大会を通じて、日本に足りなかったこと、リオから学ぶべきことを一つ一つ精査し、四年後に生かしてほしい。その時、バリアフリーの社会がきょうよりも成熟していて、その結果、メダルが増えるのなら素晴らしい。勝者にも敗者にも惜しみなく送られたカリオカの歓声が心地よく耳に残っている。（本社パラリンピック取材団キャップ・村瀬悟）

論説：リオ・パラリンピック閉幕 「前向きにさせる力」東京へ

佐賀新聞 2016年09月20日

南米初開催となったブラジル・リオデジャネイロ・パラリンピックが、12日間の熱戦に幕を閉じた。多くの困難に立ち向かい、肉体的、精神的な限界に挑み続ける選手たちの姿は、声援を送る私たちも大いに勇気づけてくれた。

159カ国・地域と、初めて結成された難民選手団、合わせて約4300人の選手たちが出場した。日本は132人の選手団を送り込み、銀メダル10個、銅メダル14個と、メダル総数では前回ロンドン大会を上回った。

4年後の東京へ期待をつなぐ活躍だった。マイナー競技の知名度を一気に上げたボッチャ団体の銀メダル、5種目に出場して銀、銅メダルを二つずつ獲得した水泳の木村敬一選手、大ジャンプを見せた走り幅跳びの山本篤選手の銀メダラー。テレビ中継される競技が一気に増えたこともあって、従来の障害者スポーツのイメージを大きく変えた。

ただ、夏の大会では初めて金メダルに手が届かなかったという現実は、真摯（しんし）に受け止めねばならない。

各国のレベルが上がっているという事情もあるだろうが、いかに選手層に厚みを持たせ、トップアスリートを育てていくか。そのためには選手の練習環境の充実が欠かせないが、いまだに障害者への偏見が根強いという実態も明らかになってきた。パラリンピック選手であっても、練習場所の確保にさえ苦労しているという。車いすなどを使うために施設が傷みやすいのを嫌うなどの事情があるようだが、スポーツ施設のバリアフリーを一層進めていく必要がある。

今回のリオでは、オリンピックとパラリンピックで対照的な場面があった。ロシアによる国ぐるみのドーピング問題への対応である。国際オリンピック委員会（IOC）は条件付きでロシア選手の出場を認めたが、国際パラリンピック委員会（IPC）はロシア選手団を全面的に排除する決断をした。

世界反ドーピング機関（WADA）が明らかにしたロシアのドーピングの実態は、メダル至上主義に走り、アスリートの尊厳を踏みにじる内容だった。IPCの毅然とした対応

は、スポーツの公平性と選手の健康を優先する決断であり、大いに評価したい。

不幸な事故もあった。自転車男子個人ロードレースの試合中、イランのバハマン・ゴルバルネジャド選手が下り坂でカーブを曲がりきれず、壁に衝突して亡くなった。

競技のレベルが上がるにつれて、危険が増すのかもしれない。いかに安全を確保していくのか。コースを徹底的に検証し、今後に活かしていく必要がある。

閉会式で披露した日本のセレモニーは「ポジティブ・スイッチ」をキーワードに、義足のモデルやダンサー、ダウン症のダンサーらがステージいっぱいに躍動した。「パラリンピック」という名称が初めて使われた1964年の東京大会を振り返りつつ、どんな困難があろうとも、それぞれの人生に前向きに向き合おうというメッセージが伝わってきた。

いよいよ2020年の東京大会を迎える。パラリンピックには、すべての人を前向きにさせる力がある。それを体現する大会であってほしい。(古賀史生)

社説 [パラリンピック閉幕] 挑戦する人の強さ見た 沖縄タイムス 2016年9月20日

頂点を目指すアスリートたちの限界に挑む姿は人間が持つ無限の可能性を感じさせる。全力でぶつかった時のすごみは「障害を乗り越えて」という表現がやわに聞こえるほど迫力に富む。

南米で初めて開かれた夏季パラリンピック・リオデジャネイロ大会は12日間の熱戦を終え、閉幕した。共同通信社がブラジルの人たちの意識の変化を現地から伝えている。

「障がい者が健常者より劣っているという価値観がひっくり返された」「何かを克服して新境地を開く人間の強さに感動した」

22競技528種目で、200を超える世界記録が生まれたという。競技レベルは確実に向上し、義足や車いすなど用具の改良も進んでいる。

リオ大会は、パラスポーツが進化しつつあることを強く印象づけ、パラリンピックのイメージを塗り替えた大会でもあった。

印象に残った選手は多い。国内の義足スプリンター界をリードしてきた山本篤選手(34)は、金メダルにはわずかに届かなかったものの陸上男子走り幅跳びで貫禄の跳躍を披露し、銀メダルを獲得した。

視覚障がい者マラソン女子の道下美里選手(39)は、一度は自信をなくし第一線から退いた。仲間の後押しされて戻ったリオの大舞台での銀メダルはあっぱれだ。

ウィルチェアー(車いす)ラグビーの仲里進(39)や車いす陸上の上与那原寛和(45)ら県勢のベテラン選手も、パワーあふれる動きで県内の若者をうならせ、多くの県民に感動を与えた。

ウィルチェアー・ラグビーは、車いす同士のぶつかり合いが許された唯一のパラリンピック競技である。激しいタックルでぶつかると、火花が飛び散ることもあり、その迫力は半端でない。

日本チームは、3位決定戦でカナダを破り、この競技で初のメダルとなる銅を獲得した。

4大会連続出場のベテラン仲里選手と、「沖縄ハリケーンズ」のチームメートである乗松聖矢選手(26)がともに出場し、持てる力を最大限に発揮して勝利に貢献したことは、沖縄にとっては、まさに値千金。ベテランと若手の活躍をたたえたい。

車いすT52クラスの1500メートル決勝に出場した上与那原選手は、メダルこそ逃したものの4位に入賞し3大会連続出場の意地を見せた。3位との差はわずか0秒08だった。

日本選手団は史上初めて、金メダルなしに終わり、目標の「金10個」には遠く及ばなかった。ただし、メダル総数は銀10、銅14で、前回2012年のロンドン大会を上回っている。

この事実は、日本選手が金メダルを狙える力を備えていること、しかし、世界的に競技レベルが向上しメダル争いが激しくなってきたこと、を示している。

2020年の東京大会に向け選手強化が必要だ。練習場や練習時間は十分に確保されているのだろうか。県が音頭を取って県民の関心を高める取り組みが欠かせない。

転倒、立ち上がり走った 聖火リレー最終走者の勇気に涙 朝日新聞 2016年9月19日

マルサールさん=ロイター



閉幕したリオ大会だが、約2週間前の開会式で見ている人に勇気を与えた聖火リレーの最終走者がいた。足が不自由のため、転倒したが、立ち上がり聖火を運んだ地元のマルシア・マルサールさん(56)。母国に初めてパラの金メダルをもたらした元陸上選手だ。「直前の大雨で足が



滑ったの。神様が私の歩く姿に感動し、涙を流したのかな」と笑顔で振り返った。

開会式で聖火を点灯する最終走者4人の中に選ばれた。式典終盤を襲った土砂ぶりの雨の中、左手でトーチを掲げ、右手で杖をつき一歩、一歩と進んだが、転んでしまった。「とにかくトーチを早く拾わないと、という気持ちでいっぱいだった」



そばに落ちたトーチを拾い上げ、再び歩き出すと、会場からは割れんばかりの拍手と声援が上がった。ところが、マルサールさんの耳には全く届かなかったという。

「耳に式の進行を告げるイヤホンがついていたから。でも観客席に涙を流す人がたくさんいて、もらい泣きしてしまった」

2歳の時、はしかがもとで脳性まひに。16歳で陸上に出会い、パラリンピックは1984年に陸上200メートルで金メダル、88年には陸上100メートルで銀メダルを獲得した。リオから約80キロのリオ・ポニート市の自宅で80歳を超える母らと暮らす。



聖火リレーの話がもたらされたのは、開会式の約1週間前。組織委からはリレーの距離を短くする話もあったが、自宅の庭で、ヘアクリームの容器をトーチに見立てて練習。前日の予行演習でもうまくいったので、断ったという。

パラ期間中、陸上や車いすバスケットなどを観戦した。行く先々で、記念撮影を求める人たちに囲まれたという。「まるで政治家になった気分。改めて聖火ランナーに選ばれたことを名誉に感じている」

4年後は東京でパラが開催される。マルサールさんは「スポーツはみんなのもの。障害者も、高齢者も、たくさんの人にスポーツを楽しんでもらいたい」と話す。最後に逆に質問された。「4年後も私が東京に行って聖火をとりたい。誰か連れて行ってくれないかな」(山本亮介)

障害者用ホテル客室不足懸念 事業者二の足、国や都も対応遅れ

産経新聞 2016年9月20日

車いすのまま入れるバスルーム。入り口は広く、浴槽も低くなっている＝東京都中央区のホテルユニゾ銀座七丁目（蕎麦谷里志撮影）

4年後の東京五輪・パラリンピックで、障害者が宿泊できるホテルの不足が懸念されている。法律で求めている水準が「50室以上の施設に1室以上」と少ない上、事業者側も設置に後ろ向きなためだ。

「車いすの団体客が泊まれる施設を探すのは一苦勞。4年後は世界中から車いすの人が来る。十分な対応ができるのか」。車いすの利用者でバリアフリーに関する執筆や講演活動を行う木島英登さん（43）は不安を口にする。

トイレと浴室

木島さんによると、日本のホテルを車いすで利用する際、大きな障害となっているのはトイレと風呂だという。

部屋が広い上に、シャワーだけの部屋などがバリアフリー対応になっている米国に比べ、日本のビジネスホテルは湯船とトイレが一体となった施設が多く、車いすで一般の客室を使うことが困難になっているという。

木島さんは「1日程度なら風呂を我慢し、トイレはロビーの障害者用を利用して一般の部屋に宿泊できるが、連泊となると難しい」と話す。

平成18年に施行されたバリアフリー法では、50室以上のホテルには必ず1室以上は車いすなどに対応した障害者用客室を設置することが義務づけられている。ただ、同法では1千室以上の大型ホテルでも1室あれば基準を満たすことになり、障害者用客室が増えない一因となっている。

国土交通省は同法とは別に省令で、客室が200室以下のホテルは2%、200室を超えるホテルは1%に加え2部屋を、障害者用客室にすることを求めているが、強制力はない。補助金制度も設けているが、18年の省令施行から26年度までに、東京都で認定を受けたホテルは11件にとどまっている。

コストが負担

事業者にとっても、バリアフリー化を積極的に進められない事情がある。

「高額な改修コストが負担になっている」と話すのは全日本シティホテル連盟の粉川（こがわ）季雄専務理事だ。入り口や通路、風呂などを広く造る必要があるため、ビジネスホテルなどでは障害者用の部屋を造る際、現状では2つの客室を1つに造り替えている。「2部屋分の料金はとれない。経営効率の点でも多くのホテルが頭を悩ませている」

国や都の現状把握も進んでいない。都によると都内には27年3月31日時点で10室以上の客室を持つホテルは675施設（9万8644室）ある。しかし、障害者対応の客室数は「把握していない」（都担当者）。危機感を持った国交省は今年9日、専門家や障害者団体らによる検討会を設置。既存のホテルを活用しながら、障害者用客室を増やしていく検討を始めた。

東北福祉大教授で日本身体障害者団体連合会の阿部一彦会長（64）は「高齢化社会という観点でも、ユニバーサルデザインの客室が増えることは望ましい。利用者の声が反映される仕組みづくりも必要だ」と話している。



高齢者らを財産侵害から守ろう 和歌山県司法書士会が無料相談会

産経新聞 2016年9月20日

高齢者や障害者らが悪質商法にだまされたり、円滑な相続手続きができなくなったりすることを防ごうと、敬老の日の19日、司法書士が無料で相談を受け付ける「高齢者・障害者のための成年後見相談会」が和歌山市美園町のJAビルで開かれた。

県司法書士会と「成年後見センター・リーガルサポート和歌山支部」が毎年開催してお

り、今回で10回目。

近年、高齢者をねらった悪質商法や詐欺などが横行していることから、国が平成12年4月、「成年後見制度」を施行。認知症などで判断能力が衰えた高齢者や障害者に代わって、家庭裁判所が認めた親族以外の第三者後見人が財産を管理したり、契約を締結したりすることができる。第三者後見人には、司法書士をはじめ、弁護士や社会福祉士などが選ばれることが多いという。

この日は、親族やケアマネジャーら20組が相談に訪れた。家裁への申し立ての流れについての質問や、「遺産の相続人の一人が認知症で話し合いができない」「障害を持つ子供が将来、成年後見制度を利用できるのか心配」などといった相談が寄せられたという。

無料相談会は毎年1回の開催だが、司法書士への相談希望者は県司法書士会で随時受け付けているという。問い合わせは県司法書士会（電）073・422・0568。

東京) やまゆり園の歌 障害者施設元職員が作曲 市川美亜子



朝日新聞 2016年9月20日
シンガー・ソングライターの宮沢勝之さん。できあがって間もない楽譜を前に、ギターを弾きながら歌う＝清瀬市

不安に押しつぶされないように。怒りに絡め取られないように——。19人が犠牲になった相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」への思いを、清瀬市の障害者施設で働きながら歌を作り続けてきたシンガー・ソングライターの宮沢勝之さん(63)が歌にした。事件から2カ月。24日に開くコンサートで初めて歌う。

のぞみ、いぶき、つばさ、すばる、みのり そして、ゆめ、はな、にじ

ポップス調の曲は、アップテンポで「やまゆり園」の居住棟の名を、一つひとつ名前のように呼びかけ、こう歌い上げる。

衝突事故防止など装備搭載 高齢者の新車購入補助 読売新聞 2016年09月20日 鳥取

◇県制度新設3万円...議会に提案

県は、衝突事故を回避、軽減する自動ブレーキなどを搭載した新車を購入する65歳以上の高齢者に対し、3万円を補助する制度を新設する。申請には、認知症の簡易検査や保健指導を受けることを条件とし、運動機能の低下など運転に支障が出る症状の早期発見にもつなげる考え。増加傾向にある高齢者ドライバーの交通事故抑止を図る。(古賀愛子)

補助対象は、▽レーダーなどで障害物を検知し、作動する「自動ブレーキ」▽走行車線からはみ出しを防止する「車線逸脱警報」か「レーンキープアシスト」▽アクセルとブレーキの踏み間違いによる事故を防ぐ「ペダル踏み間違い時加速抑制装置」——の三つの機能を搭載している新車。

購入と同時に、認知機能検査を受けることが必要。県内3か所の運転免許センターで看護師が認知症の簡易検査や保健指導を行い、受講すれば証明書が交付される。

同様の施策は、香川県が4月から新車1000台を対象に実施。8月末時点ですでに約700件の申請(見込み含む)が寄せられており、担当者は「補助があるなら装備しようという声をよく聞く。想定より申請のペースが速く、驚いている」と話す。

鳥取県では初年度、100台分で試行する方針で、県議会の9月定例会に約340万円

県内の高齢者ドライバーの現状



を盛り込んだ予算案を提案した。申請状況や費用対効果などを勘案し、来年度以降の拡充も検討するという。

背景には、高齢者が引き起こす交通事故の増加がある。県警交通企画課によると、高齢者が過失度の高い第1当事者となる人身事故は2015年に全体の23・7%に上り、11年と比べ5ポイント以上高くなった。県内の高齢者免許人口は9万人超で、同期間に2万人以上増えた。

県は9月定例会で、高齢者ら「交通弱者」の安全対策に重点を置いた交通安全条例案も提案。高齢者ドライバーへの啓発強化などを盛り込んだ。県くらしの安心推進課の笹津健二課長補佐は「補助制度などを通じて、一人ひとりが安全運転への意識を高める契機にしたい」と話している。

心のケアに国家資格「公認心理師」制度を創設

読売新聞 2016年9月20日

厚生労働省と文部科学省は、心のケアにあたる国家資格「公認心理師」の制度を創設する。うつや虐待、不登校など心の問題が深刻化し対応が求められる中、一定の質を持った心理職の養成が狙い。20日に、教育カリキュラムを決める初の検討会を開く。

厚生労働省研究班の2014年度調査では国内で働く心理職は約3万8000人～4万人。医療機関や学校、企業、警察や裁判所など活躍の場は広がっている。一方で、様々な民間資格が乱立、認定条件や試験・更新制度は様々で技量に差があることが指摘されていた。

このため、誰もが安心して心のケアを受けられる仕組み作りを求める声が高まり、昨年9月、国家資格化を定めた公認心理師法が成立した。18年に、第1回の国家試験が行われる予定だ。

同法によると、受験資格は、大学と大学院で指定する科目を修めた人や、大学で指定科目を修めた後、一定の実務経験を積んだ人などだ。現在、心理職として働く人も、所定の条件を満たせば、施行後5年間は受験できる経過措置がある。

検討会では、公認心理師に必要な知識や技術について整理し、指定科目や、何を実務経験と認めるかなどを話し合い、今年度中に報告書を取りまとめる。

正平調

神戸新聞 2016年9月20日

スポーツを見ると、最も心奪われるのは勝ち負けではない、プレーの美しさだ。作家の奥田英朗（ひでお）さんがかつて、オリンピック観戦記で書いていた◆鍛え上げた肉体。無駄のない、完成されたフォーム。パラリンピックを見て奥田さんの言葉を思い出した。不自由な体で自由になろうとするアスリートの躍動感が、体全体にみなぎっていた。義足にも、義手にも、車いすにも◆ボッチャ。目標に向けて球を投げ合い、その近さを競う。日本チームは銀メダルをとった。亡き父のために、の思いで戦った藤井友里子さん。メダルよりも、彼女の言葉に父は涙したかもしれない。「障害者でよかった。脳性まひでよかった」◆シャルコー・マリー・トゥース病、潜在性二分脊椎症、デスモイド腫瘍、網膜色素変性症…。病の名を多く知った。サメに足を食われた、戦場で失明したという海外選手もいた。絶望から始まった、その競技人生を思った◆「視覚障害は不便だが、人生は不幸じゃない」。柔道の広瀬誠さんはこのことを娘たちに伝えたくて、4大会連続の舞台に立った。決勝で負けたとき、6歳の長女は泣いた。「だってお父さんが頑張ってくれたんだもん」◆走る。跳ぶ。泳ぐ。投げる。その姿はみな、美しかった。4年後、東京で。いやまの競技場でも、また見たい。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行